

門川京都市長へのインタビュー 10月2日（火）

学院生代表の後期ブロック7名の質問を通して、大原地域で京都大原学院を中心としてより良い教育をどのようにしていくかについて、次のように対談が進められました。

—10年前、京都大原学院ができた時にどういう思いでいらっしゃいましたか。—

「大原は、素晴らしい歴史と伝統文化があると同時に、人々の暖かさを感じる最高の地域。日本のふるさと京都大原。日本の文化・自然を存分に感じて育った子どもたちが自分の希望に基づいて進路を開拓し、世界で活躍し、また大原へと帰ってくる、そんな学校であって欲しい。」

—現在の京都大原学院をどう思っておられますか。—

「地域に根ざし、地域とともに発展していく学校。小中一貫校として全国のモデルになる取組が行われている。」

—これから京都大原学院がどうなっていって欲しいと思いますか。—

「何を学んだか、だけでなく、何を考え、何ができるようになったかも大切。できるようになった力で、世の中のために力を尽くしていただける人が育っていく学校になって欲しい。」

—一貫校になる前の大原小学校・中学校の印象は何かお持ちですか。—

「30年ほど前、観光客の増加により、ポイ捨てなどが問題になっていた。その時に、街を美しくしようという取組を大原中学校生徒会が始めた。生徒会が立ち上がって、街の中に生徒会のカードが貼られていた。これが人々に感動を与え、先進的な取組となった。今年も市民総行動があるが、そのたびに大原中学校の生徒会を思い出す。」

—10年前、京都大原学院を残す上で何が一番大変でしたか。—

「地域住民のみなさんの総意がまとまれば大丈夫だと思っていた。大原に小中一貫校として学校を残し、発展させていくんだ、そのためにみんなで大事にしていこう、という気分さえできたら大丈夫だと。そして、心配は杞憂であった。」

—小規模校として、どういう課題があると思いますか。—

「例えば部活動が選択できないなど、スケールによるデメリットはあるだろう。しかし、選択できればそれが良かったというものでもない。いまある条件を最大限に活かして、地域の応援のもとに、課題は克服できていると思う。」

—京都大原学院ができたときはどういう心境でしたか。—

「皆さんが思っている以上に、京都の大原というところは、全国の人、世界の人が尊敬し、憧れているところ。以前、皇后陛下とのお話でも話題になったほど。世界から注目されている場所に生まれ、育ち、学んでいることに誇りを持って、地域のために、世界中のために頑張って欲しい。」

—10年前の京都大原学院の9年生（一貫校開設以前の生徒）に何を伝えたいですか。—

「京都で仕事をしていると、例えば成人式の日、学校行事の時に会いましたと言ってくれることがある。みんな私の子どもようで、そういうご縁はありがたいと思う。したがって、後輩たちが頑張っていると伝えたい。」

—現在の京都大原学院と地域との関わりについてどう思われますか。—

「地域の人、保護者、PTA、校長先生はじめ教職員みんなが、子どものために、学校のために何ができるかを考え実行してきた。これは京都市全体のモデルである。また、日本中の教育を改革してきた。そう自信をもって、また保護者、地域の方、先生に感謝の気持ちを持って頑張って欲しい。」

インタビュー後に「感謝力」についてのお話も伺うことができました。ラグビーの平尾さんや指揮者の佐渡さんは、「いい試合ができた」「音楽で素晴らしい演奏ができた」というときに、それを「自分の力だ」と思ってしまうと自分の力にはならず、「みんなのおかげだ」「ありがたい」と思ったときに、やっと自分の力になる、という考えを持っておられるということです。感謝の気持ちを持つ大切さを教えてもらえる言葉です。

また、学院生が、小中一貫校になる前の大原中学校の印象について聞いた際には、大原中学校の生徒会が行っていた、地域をきれいにしようという取組について言及されました。当時、中学校の生徒会が主体的に地域をきれいにしようと取り組んでいたのは、京都市の中では先進的であったことが、今でも市長の記憶に深く残っているとのことでした。京都大原学院になった今では、その取組は「大原大掃除」として継続されており、学院生にもその精神が受け継がれています。

関係者の皆様本当にありがとうございました。